

MMPI 疎外感尺度の基礎的研究

平松記念病院 本 多 悠
札幌学院大学大学院臨床心理学研究科 井 手 正 吾

要 約

疎外感は精神病理や人格理解において重要な概念である。MMPIには4つの疎外感尺度(Pd4A, Pd4B, Sc1A, Sc1B)があるが、その元となっているHarris & Lingoesの下位尺度の研究は数少ない。本研究では、大学生40名のMMPIとロールシャッハ・テストの結果をもとに、相関と高低群比較を行い4つの疎外感尺度がどのような性格特徴と関連しているか検討した。その結果、Pd4BとSc1Bは情緒的な関わりにおける繊細さと関係しているだけでなく、生じた不安を客観的にとらえ距離をとる傾向が示された。Pd4AとSc1Aは、共通して周囲との関わりを避けるが、人なつこさに違いがあると考えられた。さらに、疎外感尺度が高い者は、人への関心の高さ、受動的傾向、自分が抱くネガティブな感情への敏感さ、不安の強さを有しやすいことが示唆された。そして、濃淡反応の出現が多くなる可能性が示され、自発的かどうかにかかわらず“感じる”ことへの敏感性が疎外感と関係していることが考えられた。

【はじめに】

疎外感とは精神病理や人格理解において重要な概念であるが、MMPIには第4尺度(Pd)と第8尺度(Sc)の下位尺度にPd4A (Social Alienation = 社会的疎外)、Pd4B (Self-Alienation = 自己疎外)、Sc1A (Social Alienation = 社会的疎外)、Sc1B (Emotional Alienation = 情緒的疎外)の4つの疎外感尺度がある。Greene (1980)によると、Pd4Aが高い場合、他者からの孤立感を抱き、所属感が欠如し、困難さの責任を外的要因とし、社会的関係において不満足感が強い傾向があるとされている。Pd4Bが高い場合は、率直に罪を認め、自己顕示欲が強い状態で、意気消沈し、自己統合が欠如している傾向があると考えられている。また、Pd4Aは過敏性と、Pd4Bは神経症的傾向と関連があるとされている。Sc1Aが高い場合、他者との親密な関係の欠如を感じ、他者と深く関わり合うことに一線を置く、または避ける傾向があるとされている。また、Sc1Bが高い場合は、自分自身を親密に感じるができなかつたり、自分自身をなじみのないもの・奇妙なものとして体験し、感情の平板化または歪みや無感動を示す

傾向があると考えられている。

木場 (2001; 2002)によると、Pd4AとPd4Bは完全に分化しておらず、関連が示唆されている。Sc1AとSc1Bも同様の結果が示されている。また、Pd4AとSc1AについてLevitt & Gotts (1995/2012)は、臨床的有用性を高く評価している。一方で、Pd4BとSc1Bについては、「いつも憂うつである」などの主に抑うつに関連した項目で構成されていると、「項目の均質性はあるが、誤解を招くような名前がついている」と指摘している。実際にPd4Bの質問項目を見てみると、Levitt & Gottsの言うように、確かに構成している項目には抑うつに関連した項目が含まれている。Sc1Bの質問項目も、抑うつ関連以外の項目があるものの、Pd4Bと同様に抑うつの内容が多い項目となっている。しかし、それゆえに抑うつの傾向を表わしていると簡単に判断することはできない。MMPIは経験的手法で作成された検査であり、項目の内容のみから結果の判断を行わないからである。筆者らがこれまでMMPIを使用してきた中で印象では、Pd4BとSc1Bは抑うつと関連した項目で構成されていながらも、

何かしらの「自分に対する態度, 気持ち, あり方」を反映しているように思われる。実情としては, Harris & Lingoes の下位尺度に関する研究が多くなされていないため, Pd4B と Sc1B がどのような人格・行動傾向と関連があるかについて多くのことはわかっていない。

そこで, 今まで有用とされてきたにも関わらず先行研究が少なく, どのような人格特性と関連しているかが明確になっていない MMPI の4つの疎外感尺度について, MMPIに加えてロールシャッハ・テスト (以下, ロ・テスト) を用いて詳細な検討を行ったので報告する。

【方法と手続き】

大学生を対象とし, 予備調査として疎外感に関する質問紙 (Pd4A, Pd4B, Sc1A, Sc1B で使われている54の質問項目) を206名 (男性78名, 女性128名) に実施した。本調査は予備調査協力者のうち40名の学生を対象とし, 一人ひとり個別にロ・テストとMMPIを行った。男性12名, 女性28名となり, 平均年齢は20.4歳, SD = 1.1だった。調査は2013年4月から9月に行い, 協力者には本研究へのデータ提供に対してあらかじめ同意を得ている。

MMPIは新日本版を用い, 冊子形式で行った。また, MMPIのデータは, 処理ソフト MiW (井手, 2011) の最新版を用いた。尺度の名称および各尺度の項目の構成については主に井手 (2010) をもとにしている。

ロ・テストは, 筆者 (本多) が施行した。教示・スコアリング・解釈は片口 (1987) に準拠して行った。スコアリングは筆者の他, 大学院生2名で行い, 一致をみない場合は, 心理臨床 (ロ・テスト経験を含む) 10年以上の経験者と協議の上決定した。

【結果と考察】

1. 本調査協力者40名全体の特徴

本調査協力者40名のMMPI結果をみてみると (Table 1), L・F・K尺度は山型でF尺度がT得点で60を超えており高くなっている。第6・7・8尺度も60以上であり, 伊藤 (1997) が示し

ている大学生のプロフィールよりもやや高く, 青年期の特徴が強くみられる集団であると考えられる。第1・2・3尺度は山型を示している。青年期に高くなりやすいと言われている第4・9尺度は他の尺度と比べて高くなっていない。第0尺度はやや高く, 社会的内向性を示している。また, 男性の第5尺度を女性方向に修正したMff尺度はやや低くなっており, 受動的な傾向がみられた。4つの疎外感尺度は, 井手 (2010) の大学生集団よりも若干高くなっており, 基礎尺度と同様の傾向を示している。

ロ・テストの各指標は正常範囲内を示したものが多かった (Table 2)。平均値を見ると, 反応数, 領域のパーセンテージは正常範囲内であった。WがDの2倍以上 ($W \geq 2D$) だった者は3名, 12名は反対にDがWの2倍以上 ($D \geq 2W$) だった。領域では, 主drと副Sがある程度みられる。Mは平均すると正常の範囲であり, 修正BRSで加点となる値となっている。FCやCFも正常範囲内である。MとΣCの平均値にほとんど差はみられなかった。FM+m:Fc+c+C'ではFM+mの数がやや多く, 潜在的には想像力が豊かで, 自分なりに物事を考えるような傾向が強いかもしれない。Fc+c+C'とFC+CF+Cは若干, 多めであるが比率としては正常の範囲内だった。また,

Table 1 協力者40名のMMPI基礎データ

	mean	sd	min	max
?	45.38	3.15	44	57
L	46.98	8.04	33	66
F	61.78	16.65	42	100
K	44.15	9.78	26	75
Hs	51.65	14.08	36	88
D	58.98	12.52	37	88
Hy	51.4	12.67	31	81
Pd	54.88	14.02	37	85
Mf	51	8.4	35	72
Pa	62.8	14.93	38	93
Pt	62.65	15.54	31	105
Sc	60.73	19.18	37	123
Ma	55.3	9.6	34	78
Si	57.98	12.6	32	87
Mff	46.45	7.66	28	61
Pd4A	60.03	13.59	41	89
Pd4B	60.28	13.4	39	86
Sc1A	63.38	18.06	40	108
Sc1B	58.93	15.69	36	100

FC>CF+C となっており、感情の統制に問題はみられず、無彩色図版にも有彩色図版にもある程度の感受性があり、感情の動きにも問題はないと考えられる。H%・A%も正常範囲内であり、人間反応の中では、非現実ではなく現実反応のほうが多く、動物反応でも同様の結果となっており、特に問題はみられなかった。Content Range も平均的な値である。P (平凡反応) は全体としては正常の範囲内であった。無彩色と有彩色の図版それぞれの R₁T (初発反応時間) の平均は20秒台で、

Table 2 協力者40人分ロールシャッハ基礎データ

	mean	sd	min	max
R	28.9	14.4	10	65
Rej	0.1	0.2	0	1
W	11.1	6.8	1	33
D	13.2	10.5	1	42
W%	45%	27%	5%	85%
Dd%	10%	10%	0%	35%
S%	2%	4%	0%	15%
M	5.4	4.8	0	20
ΣC	4.4	4.0	.0	17.8
FM+m	7.8	4.8	1.0	20.0
Fc+c+C'	4.2	3.7	0	18
8-10/R %	32%	7%	16%	48%
FC	3.9	3.5	0	15
CF+C	2.4	2.7	.0	12.5
FC+CF+C	6.3	5.5	.0	24.5
FM	5.2	3.5	0	15
F%	31%	16%	5%	90%
ΣF%	91%	8%	73%	100%
F+%	75%	19%	33%	100%
ΣF+%	82%	11%	49%	100%
R+%	75%	13%	41%	100%
H%	20%	12%	0%	47%
A%	41%	17%	17%	90%
At%	3%	4%	0%	16%
P	4.0	1.5	1.0	6.0
P%	17%	9%	4%	43%
C.R	8.5	3.4	2	20
D.R	7.1	1.9	2	11
主dr	3.5	4.3	0	16
副dr	0.1	0.2	0	1
主S	0.8	1.4	0	7
副S	2.7	1.9	0	9
修正BRS	2.4	16.0	-35	27
修正BRS +	19.6	8.2	3	37
修正BRS -	-17.3	8.6	-39	-4
RIT	23.5	18.4	7.5	83.5
RIT (N.C)	21.5	13.2	6.6	59.8
RIT (C.C)	25.4	25.3	5.4	114.2
ISOL	0.24	0.13	0.00	0.53

また2つの R₁T に大きな差はみられなかった。Exner (2000/2002)が作成した Isolation Index (以下、ISOL) は、指標の基準とされている0.26を下回っており、極端に人との関わりを避けるような傾向はないといえる。

以上、協力者40名の MMPI とロ・テストの結果から、この集団の特徴をみてきたが、集団全体としてみると、特に大きな問題はないと考えられる。MMPI では青年期の傾向がやや強くでている結果となり、多少の偏りはあるものの、値が若干高めであることを考慮しながら検討を進めれば、本研究の目的である疎外感尺度の特徴について十分検討可能なデータであると判断される。

2. 相関からの検討

40名の協力者の結果をもとに相関係数を算出した。なお、相関係数は Spearman の順位相関係数を用いた。

4つの疎外感尺度同士は強い相関を示している (Table 3)。MMPI の多くの尺度では、構成上項目が重複しているため相互に関連しあっている。そのため高い相関を示しやすい特徴があるが、4つの疎外感尺度はお互いに関連し合っていると見えるだろう。しかし、どれも同じような相関の値を示しているわけではないため、それぞれの尺度が測っている人格特性がやや違うともいえる。

4つの疎外感尺度と正の相関を示す MMPI の尺度が多くみられた。MMPI の尺度との相関については、MMPI の項目の構成上強い相関を示しやすいことや、もととなっている集団の値が若干高めであることを踏まえ、負の相関がみられた尺度と、正の相関を示しなおかつ相関係数に違いがみられた尺度・指標をもとに検討する。なお、ロ・テストは相関が見られた指標のみを示す。また、本研究では弱い相関があるとする基準を±

Table 3 4つの疎外感尺度の相関

	Pd4A	Pd4B	Sc1A	Sc1B
Pd4A		0.75	0.75	0.59
Pd4B			0.86	0.71
Sc1A				0.69
Sc1B				

0.30としている。4つの疎外感尺度とMMPIおよび口・テストの相関の結果をTable 4-1～4-4に示す。

Pd4Aは口・テストでcF+c+KF+Kをはじめ二次形態反応との相関が多いため、ハッキリとし

Table 4-1 負の相関がみられたMMPIの尺度と値

	Pd4A	Pd4B	Sc1A	Sc1B
L		-0.33	-0.31	
K	-0.63	-0.54	-0.56	-0.35
R	-0.39			
Es	-0.59	-0.73		
Do	-0.42	-0.73	-0.60	-0.36
Re	-0.55	-0.61	-0.61	-0.33
St	-0.34	-0.36	-0.45	
O-H			-0.32	
I-Do				-0.31
Astvn	-0.33	-0.40	-0.38	-0.39
5C	-0.43	-0.45	-0.50	-0.45
As	-0.47	-0.40	-0.39	
Ie	-0.51	-0.59	-0.69	-0.44
Tp	-0.80	-0.90	-0.86	-0.63
D-S	-0.57	-0.54	-0.53	-0.40
H-S	-0.43	-0.48	-0.47	
Dn	-0.46	-0.56	-0.55	-0.38
Hy1		-0.48	-0.49	
Hy2	-0.55	-0.46	-0.44	-0.36
Hy5		-0.31		
Pd3		-0.52	-0.43	-0.35
Mf6	-0.31			
Pa3	-0.37			
Ma3	-0.31	-0.43	-0.51	
NAR		-0.37		

Table 4-2 正の相関に違いがみられたMMPIの尺度・指標と値

	Pd4A	Pd4B	Sc1A	Sc1B
Hs	0.11	0.24	0.36	0.24
Hy	0.14	0.23	0.33	0.27
Ma	0.45	0.31	0.31	0.20
IR	-0.02	0.31	0.28	0.26
GI	0.49	0.30	0.42	0.26
SOC (wig)	0.22	0.52	0.46	0.37
REL (wig)	0.37	0.20	0.10	0.09
PHO (wig)	0.46	0.45	0.60	0.28
HYP (wig)	0.57	0.52	0.50	0.24
I-De	0.40	0.47	0.46	0.28
I-OC	0.62	0.50	0.52	0.25
Pd-S	0.31	0.17	0.21	0.23
Ma4	0.60	0.34	0.44	0.22
SZD	0.23	0.49	0.44	0.41
Nar-LG	0.48	0.27	0.38	0.23

※相関がみられた数値は太字

Table 4-3 正の相関がみられた口・テスト指標と値

	Pd4A	Pd4B	Sc1A	Sc1B
W%			0.33	
Fc+c+C'				0.43
CF+C				0.35
C.R				0.34
D.R		0.37		0.55
FK+Fc		0.31		0.39
cF+c+KF+K	0.35	0.39	0.36	0.48
(H)+(Hd)	0.31			
Hd		0.32		0.31
m				0.31
Σc				0.47
ΣK		0.35		0.35
FK(1FK+0.5副FK)		0.33		0.35
KF+K	0.35	0.35		
NonF				0.34
干				0.32
修正 BRS08a	0.32	0.36	0.32	0.33
修正 BRS10b			0.31	
修正 BRS15a	0.34			
修正 BRS16				0.41
修正 BRS20b				0.33
修正 BRS30	0.36			
主 W			0.30	
副 A		0.36		0.33
副 CF			0.35	
副 cF				0.39
副 KF	0.40	0.40	0.36	0.30
副 Ad	0.35	0.43	0.44	0.32
主 Map			0.32	
副 Abst		0.37	0.41	
副 Cl	0.30	0.40	0.35	
Dysphoric				0.34
Caricature	0.31			
ISOL		0.38	0.39	

Table 4-4 負の相関がみられた口・テスト指標と値

	Pd4A	Pd4B	Sc1A	Sc1B
Rej				-0.31
Σ F%				-0.32
A%		-0.34		
TT	-0.41			
RT	-0.42		-0.31	
修正 BRS02				-0.31
修正 BRS03	-0.31			
修正 BRS04c				-0.35
修正 BRS11				-0.30
修正 BRS12a	-0.32	-0.35	-0.35	-0.40
修正 BRS14				-0.30
修正 BRS15b	-0.34			
修正 BRS18	-0.35			
修正 BRS20c				-0.31
副 Expl			-0.33	

ない漠然とした感情があることが考えられる。色彩の微妙な変化に敏感であると考えられ、繊細で傷つきやすいようなところもあるかもしれない。(H) + (Hd) と弱い相関があり、非現実的にとらえることで現実と距離をとり安定を保っているのではないだろうか。人との関わりに対して消極的であるような傾向を示す MMPI の追加尺度 SOC (wig) と SZD とほとんど相関がなく、また、人との関わりにおいて面倒な問題を避ける傾向があると値が高くなる Mf6 とは弱い負の相関があり、他の 3 つの疎外感尺度 (Pd4B, Sc1A, Sc1B) と異なり人との関わりを避けるような傾向がみられなかった。一方で、5C, Hy2, Pa3 とは負の相関がみられた。Wrobel (1992) はこの 3 つの尺度が高い場合、他者を肯定的に捉えていることが多く、低くなると不信感や敵意が強くなることが多いと述べている。したがって本結果からは、他者を肯定的にとらえ、素直に関わるような傾向と反対の方向性を示していると考えられる。つまり、対人関係において極度に緊張したり、苦手意識を持ったりすることはなく、人との関わりを肯定的にとらえ楽しむという気楽さもないような特徴と Pd4A は関係している可能性が示されていると考えられる。

Pd4B は、FK+Fc や cF+c+KF+K など陰影と関連する多くの指標と正の相関を示した。そのため色彩の変化に対する感性が強いことが考えられる。物事の細かなニュアンスを感じとることができる繊細さがあると思われるが、そのため些細なことを気にかけやすい特徴と関係しているのかもしれない。Pd4A でも陰影反応との関連が示唆されたが、Pd4A と異なるところは、形態が優位な FK とも関連しており、材質感だけでなく立体的に感じる感性とも関係している可能性がある点である。対象と距離をとる傾向があると考えられる。ISOL と正の相関があるため、人との関わりを避けるような傾向とも関係していると思われる。A% と負の相関がみられたが、一方で副 A とは正の相関があった。したがって、常識的または一般的なものにとらえ方もできるが、動物反応を主にした反応は少ないことから、周囲と少し違うようなまとめ方をするような人格特性と関係し

ているのではないだろうか。KF に関連した指標との相関からは、漠然とした不安との関連も考えられる。MMPI の SOC (wig) や SZD とは正の相関を示し、不安は対人関係において消極的で自信がないような傾向とも関係しているかもしれない。IR とは弱い正の相関を示していることから、不安を感じていたとしても気楽に表に出さない特徴にもつながるものと思われる。I-De と正の相関がみられ、周囲の影響を受けやすく受動的になりやすい傾向との関連も考えられる。活動性は高く (第 9 尺度・HYP (wig) と正の相関)、様々な物事に関心を持ち行動するような特性と関連があるようである。

Sc1A は W% と主 W と弱い正の相関があったため、物事の全体をとらえようとする傾向や、抽象的にまとめる傾向と関連していると思われる。そのような傾向が副 Abst との相関にも繋がっているのではないだろうか。また、漠然と全体を把握することで自分の感情がハッキリしなかったり、周囲に対して受動的な傾向につながっていると考えられる (I-De でも中程度の相関)。副 CF と相関がみられ、強くは表出しないものの、感情を表に出す傾向との関連が考えられる。その可能性は MMPI の第 1・3 尺度と正の相関を示したことからも示唆される。さらに、他の疎外感尺度と同様に KF に関連した尺度との相関も示され、漠然とした不安感との関係も考えられる。PHO (wig) と強い相関を示しており、臆病な面とも関係している可能性がある。さらに、SOC (wig) や SZD との相関からは人と積極的に関わらず距離をとるような傾向との関連が考えられる (主 Map や ISOL とともに正の相関)。

Sc1B は他の尺度と同様に口・テストの陰影に対する敏感さに関連する指標との相関がみられたが、CF + C と正の相関を示したため、無彩色だけではなく、有彩色に対する感性とも関係していると考えられる。この指標の上昇は Sc1A と同じように漠然とした不安だけでなく、緊張も伴う不安の感じやすさにつながるのではないだろうか。有彩色にも陰影にも敏感であり、周囲に影響されやすくそして色々と感じやすいうえに、さらに m の総数との相関もあることから、緊張や葛藤の感

じやすさも伴うと考えられ対人関係におけるぎこちなさと関係すると思われる。Dysphoric と正の相関を示し、傷つきやすく物事をネガティブにとらえやすい面とも関係しているのかもしれない。NonF と正の相関、 Σ F% と負の相関がみられ、二次形態反応が主になるような反応がそれなりにあること、またそれに伴い形態水準干が増える傾向があるようだ。第9尺度との相関はみられず、他の尺度とは異なり活動水準の高さとは関係しないようである。また、Pd4Bと同様にFKに関連する指標とも相関がみられた。

相関をとおして4つの疎外感尺度それぞれの特徴をみると、Pd4BとSc1Bには相関関係の結果で共通している点が多くみられた。従来の解釈でPd4AとSc1Aが社会的な疎外感と関係があるとされているのに対して、Pd4BとSc1Bは自分に対する疎外感と関係があるとされていることを支持する結果といえよう。

3. 疎外感尺度の高低群比較からの検討

高低群比較では、類似点に注目し、疎外感尺度がどのような人格特性と関係しているかについて検討する。

40名の中で、4つのうち少なくとも1つ以上の疎外感尺度において、予備調査結果の平均値から1SD以上の高い値を示した者は13名(男性4名、女性9名)だった。この13名を高群(以下、H群)とした。40名中11名がどの疎外感尺度においても60未満の値を示しており、この11名(男性3名、女性8名)を低群(以下、L群)とした。

3-1. MMPI 高低群比較

MMPIの結果のHL比較をMann-WhitneyのU検定を用いて行った。結果をTable 5-1と5-2に示す。

基礎尺度のプロフィールをしてみると、H群の値は全体的に上昇傾向にあり、L群は50前後の安定した値を示していることがわかる(Table 5-1, Figure 1)。妥当性尺度は、H群は極端な山型を示し、F・K尺度で有意な差がみられた。H群は、生活が上手くいっていないという不全感や、自分が周囲の人と異なると感じていたり、自分を

否定的にとらえ、自信がない傾向があると考えられる。第1・2・3尺度はH群が山型を示し、第2尺度が高くなっており、H群が有意に高い。H群はL群と比べると、悩みやすく気分の落ち込みを感じたり、現状に不満を感じやすいと思われる。そのような傾向は、第2尺度の他、Es, Mt, DEP (wig), MOR (wig), D (tsc), I-SC, FOS (POS, NOS, MOS), D1, D4, D5で有意差がみられたことから支持されている。第4尺度はH群が有意に高く、H群の第4・5(男性の値は女性方向に修正したMff)・6尺度はV字型になっており、自分の考え方や意見を持っているが、周囲の反応に敏感で受動的であるため、思うように自分の思いを伝えられず、不満を感じやすいことが考えられる。受動的傾向は、DyとDoで有意差がみられたことから考えられる。さらに、H群はDy>DoとなっていることからH群が受動的であることが示されている。Dyの高さは、受動的傾向だけでなく、自信のなさや周囲の影響の受けやすさとも関係していると考えられ、F・K尺度やEs, MOR (wig), I-SCで有意差がみられたことから支持されよう。

第6・7・8尺度はH群が有意に高かったため、周囲に対する過敏さや、神経質さ、個性的な思考傾向と関連すると考えられる。第8尺度の低位尺度はすべてH群が有意に高くなったが、これはH群の第8尺度が高かったことが影響している可能性が高い。H群の者は、自分の思考や行動を統制できていないと強く感じていたり、衝動を抑えられないと強く感じていると思われる。そのため、自分がまとまりのない存在に感じるような面もあるかもしれない。しかし、そのような感覚はあくまでも主観的なものであり、周囲からは統制できていないと評価されるわけではないと考えられる。第7尺度も高いため、現実的側面にも目を向け行動できていると思われるが、H群は自分の変わった部分に目が向きやすい特徴があるのかもしれない。

社会的内向性は第0尺度で差がみられただけでなく、SOC (wig), I (tsc), Si1, Si2でH群が有意に高かった。また、Hy1, Pd3, Ma3で有意差がみられ、この3つの尺度ではH群の値が低

Table 5-1 H群・L群のMMPI結果比較(1)

	mean		median		U-test		mean		median		U-test
	H	L	H	L			H	L	H	L	
?	45.08	44.27	44.00	44.00		SOC (wig)	65.31	54.27	63.00	53.00	*
L	44.85	49.09	44.00	50.00		DEP (wig)	79.46	46.36	81.00	46.00	***
F	78.62	50.36	75.00	49.00	***	FEM (wig)	46.62	46.55	48.00	48.00	
K	36.54	50.64	36.00	49.00	**	MOR (wig)	71.77	51.64	74.00	56.00	***
Hs	58.38	47.09	54.00	47.00		REL (wig)	42.46	38.82	41.00	38.00	
D	68.62	49.91	67.00	51.00	**	AUT (wig)	56.31	46.91	57.00	50.00	*
Hy	55.77	48.18	51.00	45.00		PSY (wig)	77.62	48.82	77.00	47.00	***
Pd	64.38	45.45	69.00	44.00	**	ORG (wig)	63.46	43.64	57.00	43.00	***
Mf	50.62	52.73	49.00	53.00		FAM (wig)	65.23	45.45	61.00	44.00	**
Pa	76.92	53.00	78.00	51.00	***	HOS (wig)	63.00	46.36	65.00	42.00	**
Pt	78.00	50.82	81.00	54.00	***	PHO (wig)	56.46	43.73	52.00	43.00	**
Sc	80.00	46.09	84.00	44.00	***	HYP (wig)	60.31	46.36	60.00	45.00	**
Ma	61.54	52.36	57.00	52.00	†	HEA (wig)	65.54	46.09	64.00	47.00	***
Si	65.77	51.91	66.00	52.00	*	I (tsc)	67.31	53.82	70.00	54.00	**
Mff	44.15	47.64	45.00	47.00		B (tsc)	67.69	44.91	66.00	45.00	***
CLS	3.31	1.36	3.00	1.00	**	S (tsc)	64.08	45.09	63.00	47.00	**
disF-K	6.54	-9.73	6.00	-8.00	***	D (tsc)	75.15	49.36	80.00	48.00	***
AI	93.38	53.85	99.30	61.30	**	R (tsc)	66.85	48.18	72.00	44.00	**
IR	1.13	1.03	1.13	0.97		A (tsc)	73.00	53.18	73.00	50.00	**
GI	68.00	49.18	65.00	52.00	*	T (tsc)	74.38	45.45	73.00	48.00	***
Tper	0.51	0.38	0.48	0.38	***	POS	76.62	48.09	72.00	49.00	***
A	74.38	49.09	76.00	48.00	***	NOS	70.69	48.73	70.00	49.00	***
R	46.54	55.00	47.00	54.00	†	MOS	81.62	50.82	83.00	51.00	***
MAS	76.15	49.00	78.00	50.00	***	I-De	60.00	53.00	63.00	58.00	
Es	31.54	57.82	33.00	58.00	***	I-Do	47.77	52.91	47.00	47.00	
Lb	52.08	50.45	54.00	54.00		I-DS	73.00	47.09	75.00	43.00	**
Ca	70.69	46.18	72.00	42.00	***	I-OC	68.08	50.18	66.00	48.00	**
Dy	70.00	48.64	71.00	48.00	**	I-SC	73.77	53.27	77.00	52.00	**
Do	37.46	52.36	39.00	57.00	*	I-RD	69.23	46.73	61.00	44.00	***
Re	40.23	53.64	43.00	52.00	**	I-SP	62.62	48.36	59.00	50.00	*
Pr	62.77	47.45	62.00	51.00	**	Astvn	41.62	51.55	40.00	51.00	*
St	44.31	53.73	42.00	54.00	†	5C	43.85	53.18	45.00	55.00	*
Cn	65.46	49.36	62.00	52.00	**	E/Cy	66.38	46.55	70.00	49.00	**
Mt	75.54	47.82	75.00	50.00	***	Ho	66.46	48.00	66.00	50.00	**
MAC (49)	51.31	44.18	50.00	44.00		Pe	68.00	43.64	65.00	43.00	***
O-H	41.54	47.27	39.00	50.00		S+	70.85	48.55	72.00	44.00	**
						WA	70.69	47.82	73.00	50.00	***

†... $p < .10$, *... $p < .05$, **... $p < .01$, ***... $p < .001$

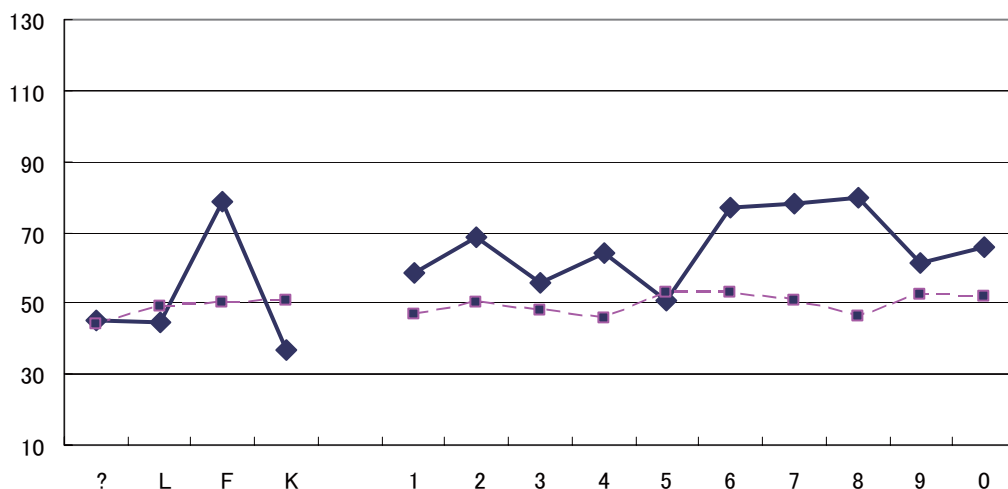


Figure 1 H群・L群のMMPI結果比較

Table5-2 H群・L群のMMPI結果比較(2)

	mean		median		U-test		mean		median		U-test
	H	L	H	L			H	L	H	L	
D-O	74.77	48.45	74.00	46.00	***	Pa-O	81.62	49.18	81.00	48.00	***
D-S	39.77	52.91	41.00	52.00	**	Pa-S	53.77	55.36	54.00	59.00	
D1	74.77	49.27	75.00	48.00	***	Pa1	77.54	47.91	79.00	47.00	***
D2	53.46	50.09	54.00	52.00		Pa2	75.08	52.64	74.00	52.00	***
D3	61.92	44.91	59.00	46.00	**	Pa3	46.00	53.73	41.00	56.00	†
D4	69.62	47.64	66.00	43.00	**	Sc1A	84.08	48.27	79.00	50.00	***
D5	75.23	52.09	77.00	51.00	***	Sc1B	73.31	42.55	76.00	44.00	***
Hy-O	70.38	47.27	69.00	47.00	***	Sc1	85.08	45.73	86.00	47.00	***
Hy-S	38.54	50.82	37.00	48.00	**	Sc2A	72.46	46.64	74.00	48.00	***
Ad	69.69	46.82	67.00	47.00	***	Sc2B	76.00	45.64	82.00	45.00	***
Dn	37.00	51.00	36.00	49.00	**	Sc2C	79.92	47.82	85.00	49.00	***
Hy1	37.77	46.36	35.00	47.00	†	Sc2	83.23	45.45	86.00	45.00	***
Hy2	38.38	53.00	34.00	50.00	**	Sc3	70.31	47.09	66.00	46.00	***
Hy3	69.69	46.55	67.00	43.00	***	Ma-O	72.00	53.64	72.00	54.00	***
Hy4	64.69	47.18	60.00	46.00	**	Ma-S	48.31	49.91	48.00	54.00	
Hy5	44.85	52.36	48.00	55.00	†	Ma1	52.54	57.00	55.00	55.00	†
Pd-O	74.15	45.82	74.00	44.00	***	Ma2	62.23	51.36	58.00	50.00	*
Pd-S	52.62	47.00	53.00	44.00		Ma3	41.77	51.64	38.00	45.00	†
Pd1	61.92	43.82	56.00	45.00	**	Ma4	61.00	48.45	59.00	47.00	*
Pd2	49.31	53.91	50.00	57.00		Si1	68.08	52.55	70.00	53.00	**
Pd3	40.38	49.36	43.00	51.00	†	Si2	56.92	48.36	54.00	53.00	
Pd4A	74.62	47.55	78.00	45.00	***	Si3	52.69	51.00	52.00	52.00	
Pd4B	75.54	47.73	77.00	47.00	***	Si4	63.31	50.18	61.00	50.00	**
Pd4	78.15	47.27	77.00	46.00	***	Si5	60.77	46.82	58.00	44.00	**
Mf1	71.62	50.82	72.00	51.00	***	Si6	68.08	53.91	66.00	54.00	**
Mf2	48.00	49.00	49.00	49.00							
Mf3	44.62	44.55	45.00	45.00							
Mf4	47.62	48.18	48.00	48.00							
Mf5	52.92	53.91	54.00	54.00							
Mf6	50.23	54.18	53.00	53.00							

†... $p < .10$, *... $p < .05$, **... $p < .01$, ***... $p < .001$

かった。したがって、H群はL群よりも人と関わることに自信がなく、多くの人と関わることに消極的であると思われる。対人関係における他者への不快感を表わすとされるSi2よりも、関わることに対する自信のなさを表わすとされるSi1の値の方が高くなっているため、H群の社会的内向性は人と関わりたいと思っているが上手く関わるできないと感じていることと関連しているのかもしれない。

他者に対する態度（他者の存在のとりえ方、他者との関わり方）を示している尺度としては、敵意や不信感に関連した尺度がある。HOS (wig), Ho, R (tsc), S (tsc), S+, Si5, E/CyはH群が有意に高く、5C, Hy2, Pa3はL群が有意に高かった。5C, Hy2, Pa3の平均をみると、L群が高い値を示したというよりもH群が低い値を示していることがわかる。Wrobel (1992)の解釈に従うと、他者に対する態度として、H群の者は対人関係において不満を感じやすかったり、他者の

言動に対して疑り深い面があり、人と気楽に関われないようなところがあると思われる。

第9尺度はH群が有意に高く、L群の平均は井手(2010)の大学生約1000人の平均と変わらない値を示していることを考えると、H群の活動性の高さがうかがえる。

不安と関連する尺度や指標では、AI, A, MASで有意な差がみられ、L群よりH群の方が強く不安を感じていると考えられる。

身体に関する尺度は、ORG (wig), HEA (wig), B (tsc), D3, Hy3, Hy4, Sc3, Si6で有意差がみられ、すべての尺度においてH群がL群よりも高かった。身体への関心の強さは、自身への関心の強さにもつながると思われ、H群の悩みやすさや自信のなさとも関係していると思われる。複数ある身体に関する尺度が疎外感尺度の上昇とどのように関連しているかについては、本研究では論じないが、身体感覚は、自身をどのようにとらえるかという感覚にもつながるため、MMPIの身

体に関する尺度が疎外感尺度の上昇と何かしら関係していることが示された。

3-2. ロールシャッハ・テスト高低群比較

ロ・テストのHL群比較の結果、有意差が認められた指標を Table 6-1 ~ 6-4 に示す。

W% はH群が有意に高く、Wが多い傾向を示した。WとDの数に差はみられなかったが、平均値をみてみると、H群はWが多くL群はDが多かった。また、W:Dでは、WがDの2倍以上を示した者が7名いた (Table 6-3)。したがって、H群の者は、物事を全体的に把握し、まとめようとする傾向があると考えられ、MMPIの結果でもH群は受動的な傾向を示していることから、W%の高さは受動的傾向とも関係していると思われる。

副Sからは、H群のほうが物事を様々な角度からとらえようとするような面や、批判的にとらえる傾向、頑固な面や何らかの攻撃性を有している

Table 6-1 H群・L群のロ・テスト結果比較(1)

	mean		median		U-test
	H	L	H	L	
R	26.8	28.4	23	23	
Rej	0	0.2	0	0	
W	13.8	10.6	12	7	
D	10	14.2	6	11	
W%	56.80%	40.90%	64.70%	44.40%	†
Dd%	7.40%	11.00%	0.00%	9.10%	
S%	0.90%	0.70%	0.00%	0.00%	
M	5.5	4	5	3	
ΣC	4.2	4.6	4.5	3.5	
FM+m	8	7	5.5	7	
Fc+c+C'	4.5	2.7	3.5	2.5	
8-10/R %	33.30%	32.00%	35.00%	30.00%	
FC	3.1	5.4	2.5	4.5	
CF+C	2.7	2	3	1	*
FC+CF+C	5.8	7.3	6	5.5	
FM	5	5	3	5.5	
F%	27.50%	39.90%	25.00%	30.40%	
ΣF%	89.40%	94.30%	90.00%	97.20%	†
F+%	67.50%	72.90%	75.00%	77.80%	
ΣF+%	79.40%	84.10%	82.90%	81.30%	
R+%	71.30%	79.50%	76.00%	78.90%	
H%	23.90%	13.20%	25.00%	12.00%	*
A%	35.00%	48.70%	30.00%	48.80%	†
At%	3.40%	1.10%	1.40%	0.00%	
P	3.9	4	4	5	
P%	17.40%	17.20%	16.70%	15.20%	
C.R	9.2	7.5	9	6	
D.R	7.7	6.4	8	6	†

†... $p < .10$, *... $p < .05$, **... $p < .01$, ***... $p < .001$

ことが考えられる。H群は、MMPIのF尺度が高く妥当性尺度は山型を示しており、自分が一般的な考え方からずれた考え方をすると感じ、また、人と同じようにありたくないという面もあることが考えられたため、そのような傾向との関連も考えられる。第4尺度やHOS (wig), S (tsc)などからも批判的、猜疑的、頑固な傾向が示されている。さらに第6尺度の高さから考えられた敏感さや、Aなどの尺度・指標の高さから考えられる不安の強さとも関係していると考えられる。

運動反応では、Mの数に差は認められなかった

Table 6-2 H群・L群のロ・テスト結果比較(2)

	mean		median		U-test
	H	L	H	L	
修正BRS	1.4	0.5	3.0	8.0	
修正BRS+	19.2	18.5	20.0	21.0	
修正BRS-	-17.8	-18.0	-19.0	-14.0	
RIT	20.5	29.0	17.0	17.3	
RIT (N.C)	20.5	24.8	16.0	19.4	
RIT (C.C)	20.5	33.2	16.2	17.8	
R/T	49.9	64.6	45.5	48.8	
FK+Fc	2.2	1.4	2.0	1.0	
F	6.8	9.8	5.0	8.0	
cF+c+KF+K	0.8	0.4	0.5	0.0	*
FK+F+Fc%	0.4	0.4	0.4	0.4	
D%	34.9%	47.2%	33.3%	40.0%	
(Dd+S)%	8.3%	11.4%	0.0%	9.1%	
H+Hd	5.1	2.7	4.0	2.0	
(H)+(Hd)	2.6	1.3	2.0	1.0	*
H+(H)	3.9	2.0	3.0	2.0	
Hd+(Hd)	3.8	2.0	3.0	1.0	†
A+Ad	8.4	11.3	7.0	10.0	†
(A)+(Ad)	1.5	0.8	1.0	1.0	
A+(A)	7.3	8.5	6.0	6.0	
Ad+(Ad)	2.6	3.6	2.0	3.0	
修正BRS07c	.54	.18	1.00	.00	†
修正BRS08a	.54	.18	1.00	.00	†
修正BRS10b	.69	.27	1.00	.00	*
修正BRS12a	.00	.27	.00	.00	*
修正BRS15a	.54	.09	1.00	.00	*
修正BRS15b	.46	.91	.00	1.00	*
修正BRS16	.54	.18	1.00	.00	†
修正BRS30	.54	.09	1.00	.00	*
NonF	2.77	2.55	3.00	1.00	†
副S	3.38	1.91	3.00	2.00	†
副CF	2.38	1.00	2.00	1.00	*
副Fc	.54	.09	.00	.00	†
主Hd	2.46	1.18	2.00	1.00	†
副Ad	.38	.00	.00	.00	*
副Pl	.85	.36	1.00	.00	†
副Obj	.77	.27	1.00	.00	†
副Abst	.38	.00	.00	.00	†
副Cg	3.38	1.73	3.00	1.00	†
主Caricature	4.69	2.64	4.00	2.00	†

†... $p < .10$, *... $p < .05$, **... $p < .01$, ***... $p < .001$

が、平均値は両群ともに修正 BRS で加点される適応的な数を示している。両群ともに想像力があり、他者の気持ちを推測したり、抽象的に物事を理解する力があると思われる。しかし、W:M をみても、H 群と L 群の比率に違いがあるようである (Table 6-4)。すでに述べたように H 群のほうが W が多いため、要求水準の高さや全体を気にしすぎる傾向があると考えられる。これは、MMPI の F 尺度をはじめ、第 2 尺度などから考えられた、現状に満足していない傾向とも関係するのかもしれない。また、修正 BRS4c (M = 2.5 ~ 3.5) で有意差がみられ、L 群は M の数は多くないが修正 BRS で加点の対象となる数であることが示された。m 反応は修正 BRS7c (m ≥ 3) で有意差があった。主 Fm など m 関連の指標の平均も H 群のほうが高い値となっており、H 群は L 群よりも m 反応を多く示す可能性が示唆され、H 群のほうが緊張や葛藤を抱えやすく、周囲からの圧力に敏感であると考えられる。H 群は L 群に比べ、周りを気にしすぎて思うように行動できなくなりやすい傾向があるのかもしれない。

色彩反応では FC の数に有意差はみられなかったが、CF 関連で有意差がみられ、H 群の方が CF を多く反応する傾向が考えられた。修正 BRS15a (FC ≤ CF + C) も H 群が有意に高かった。また、L 群で FC < CF + C 者がいなかったのに対し、H 群では 5 人おり、カイ二乗検定 (イエーツの修正式) で差がみられた ($p < .10$)。これらの結果から、H 群は情緒的刺激に対して敏感で動揺しやすい傾向があると考えられる。そのため、感

Table 6-3 H 群と L 群の W : D

	H 群	L 群
W ≥ 2D	7	2
W < 2D & W > D	2	4
W ≤ D & W > 1/2D	2	1
W ≤ 1/2D	2	4

Table 6-4 H 群と L 群の W : M

	H 群	L 群
W ≤ 2M	0	0
W > 2M & W < 3M	7	6
W ≥ 3M	1	4
W > 5M	5	1

情的になるところや、その感情を統制できないような面、周囲の影響を受けやすいようなところがあると推測される。MMPI でも H 群は受動的であり他者に敏感で、周囲の反応を気にするような共通の傾向が示されていた。

濃淡への感受性を表わす指標としては、副 Fc, cF + c + KF + K, 修正 BRS 8a (K + C = 0.5 ~ 1.5) で差がみられ、H 群が L 群よりも細かなニュアンスの違いへの感受性や感受性の強さを持っている可能性が示された。H 群は H % が有意に高く、対人的興味は L 群より強いと考えられ、濃淡への敏感さは情緒的側面を含めた対人的接触を求めていることと関連していると考えられるが、(H) + (Hd) と Hd が L 群より多く、他者と距離をとって関わるような面があることも考えられる。

反応内容の指標で有意差がみられたのは Table 6-1 と 6-2 のとおりである。H 群は L 群に比べ人間反応が多く人への関心が強いものの、非現実反応や部分反応が多い。H : Hd + (H) + (Hd) は、H 群 13 名中 12 名が H < Hd + (H) + (Hd) となり、これについて Weiner (1998) は「社会的な不快感に対する不適応の程度」を示すとしている。そして、ISOL が他者との関係を把握するために有用であると述べている。H 群と L 群の比較では、ISOL で有意差はみられなかったが、H 群の平均が、Exner (2000/2002) が基準としている 0.26 を示しており、H 群の者は L 群よりも社会的交流に積極的ではなく、人との関わりを避ける傾向があると考えられる。しかし、すでに述べたように、H 反応の多さや c への感受性から他者との関わりに無関心ではないことが考えられたため、H 群の ISOL の値は、周囲への敏感さによって、他者と上手く接することができないという感覚と関係があるのではないだろうか。H 群の主 Caricature が有意に高かったことも、このような特徴と関連していると思われる。さらに修正 BRS 30 (Dysphoric. ≥ 3) で差がみられ、傷つくことに敏感であり、また過去の対人関係において傷つくような経験があることと関連していると考えられ、H 群のほうがそのような特徴を示したと考えられる。L 群は、A % と A + Ad が有意に高かったが、A % は平均的な値を示しており、L 群のほ

うが常識的で現実的な考え方をすることを示していると考えられる。副 Ad は H 群のほうが有意に高く、この結果は H 群が部分反応を多く示す傾向と関係していると思われる。

H 群のほうが主 At が多かったのは、赤などの色彩について言及していることが推測されるため、CF の数に差がみられたこととの関連が考えられる。H 群の者は、外的刺激に反応しやすく、不安や緊張を伴いやすい傾向があるのかもしれない。また副 Abst で差がみられており、この結果は MMPI の第 8 尺度の上昇から考えられる、物事を自らの視点で様々な角度から考えられる反面、抽象的な思考になりやすい傾向にもつながるのではないだろうか。

【総合考察】

本研究では、大学生 40 名の MMPI とロ・テストの結果をもとに 4 つの疎外感に関する尺度の特徴について検討をすすめてきた。

相関では、どの疎外感尺度も濃淡(c)との関連が示されたが、FK との関連が考えられたのは、Pd4B と Sc1B だった。FK は、Exner (2000/2002) の形態立体反応 (FD)、展望反応 (V)、反射反応 (Fr または rF) のすべてが含まれているため、FK の反応内容によって意味合いが変わり、濃淡と FK が必ずしも結びつくとは言えないが、少なからず濃淡に対する感受性が関係していると考えられる。また、FK 反応を出すものは、一般的には情緒的な不安を客観的にとらえることで、自分の問題と距離をとり、安定を保とうとする傾向や、感受性の敏感さにより劣等感を感じやすい傾向があるとされている。また、論理的・知的に構成しようとする反応でもあり、ある意味、対象と距離をとろうとしていると言える。よって、疎外感尺度の中でも Pd4B と Sc1B は、感受性が豊かなだけでなくそのような傾向とも関係している可能性が考えられる。したがって、Levitt & Gotts (1995/2012) では Pd4B と Sc1B については問題があるとされているが、本研究では、Pd4B と Sc1B どちらも、上述したような性格傾向をとらえており、MMPI の追加尺度としての有用性が示唆された。Pd4B と Sc1B のとらえている特徴

の違いについてであるが、Pd4B は活動性の高さに関連があると考えられ、Sc1B はロ・テストの形態水準の低下などとの関連から、周囲からの刺激に動揺しやすく、混乱し圧倒され対人関係におけるごちなさにつながりやすいと思われる。Pd4B のほうが、周囲から疎外感を抱えていることがわかりにくいような特性が考えられる。

また、Levitt & Gotts が有用と評した Pd4A と Sc1A はどちらも、「社会的疎外」という名称であるが、2 つの尺度は似ていながら異なる性格特性をとらえていることも本研究では示された。たとえば、Pd4A は人との関わりに自信がなかったり楽しめないようなところがあるが、基本的に人との関わりを避けるということではなく、心理的に距離をとるという関わり方をする特徴と関係しているといえる。Sc1A は、Pd4A と同様に人と距離をとるような面があるが、物事を統一的・抽象的にとらえようとする傾向と関係しているようだ。さらに、漠然とした不安は感じやすく状況に影響され感情表出するような傾向とも関係あるようだが、人なつこさとの関連も示唆された。Pd4A では、そのような人なつこさや気楽さとの関連が示されていない。

HL 群のロ・テスト比較では、H 群の人への関心が強いと考えられた。さらに、副反応の動物反応と相関が示された。したがって、疎外感尺度が高い者は、人への関心が強いのでロ・テストでは動物反応が副分類となりやすく、人間反応が主反応になりやすいと考えられる。つまり、疎外感尺度が高い場合、一般的な物事のとらえ方・感じ方もしているが、一般的反応からややずれて自他に対して過敏になりやすいと考えられる。さらに、疎外感尺度が高い場合、不満や猜疑心、攻撃性を抱きやすいと考えられたが、それは実際に他者に対する不満が多かったり、攻撃的な態度をとることを示しているのではなく、そのようなネガティブな感情を抱く自分自身に敏感であるという面を表わしていると考えられる。むしろ疎外感が高い者は、攻撃性を含んだ他者に対するネガティブな感情を表に出さないようにしているのかもしれない。敏感になり過ぎ、猜疑的になる可能性もある。H 群は MMPI、ロ・テストどちらの結

果でも受動的傾向を示し、自信がない傾向があると考えられた。なお、MMPIのDyとDoは本人が意識していない側面を測っていると言われていたが、一方で意識的側面が表れるとされているI-DeとI-Doでは有意差がみられていない。表面上の受動的傾向にはL群と差はないものの、実際には受動的傾向に差があると考えられ、疎外感尺度が高い者は、人との関わりなど内面を刺激されるような場面では受動的傾向を示しやすいと言えるかもしれない。

さらに疎外感尺度が高い場合、不安も高い可能性が示された。不安感と疎外感との関連については、Rappaport (1978)の研究において、Pd下位尺度の中ではPd4AとPd4Bのみ不安と正の相関を示し、疎外感と不安との関連が示唆されている。さらにPd3と負の相関がみられたため、Pd4AとPd4Bとの関係を含め、対人関係のあり方としての“smoothness”, つまり、人あたりの良さや、潤滑な対人関係を築けることが、不安と関連していると考察している。Rappaportは、STAIを用いているため、本研究の結果に表れた不安とは異なる側面を測っていることも考えられるが、不安感の強さと疎外感の強さに関連があることは確かなようである。そして、不安はPd4AとPd4Bだけでなく、Sc1AとSc1Bとも関連していることが示唆されている。

ロ・テストにおいては、疎外感尺度と濃淡への敏感性の関連性が示された。濃淡に対する反応、特にFc・cFはKlopfer&Davidson (1962/1964)によると、ある種の接触感覚を生じさせるとされており、濃淡という細かなニュアンスに対して自ら“触れる”ことをしているといえる。そして“触れる”ことにより、触れた対象から何かしら“感じる”こととなる。本研究で疎外感尺度の値が高かった者は、自ら感じようとしているかどうかは関係なくその“感じる”というところを行っている、もしくは体験しているともいえるのではないだろうか。“感じる”ことを積極的に行っている者もいれば、自動的または受動的に“感じてしまう”者もいると思われる。“感じる”ことへの敏感性は、感性の豊かさでもあり、疎外感を感じる1つの要因とも考えられる。

大学生が対象であること、予備調査の206名の疎外感に関する尺度の結果より40名のほうがやや高い結果であることから、本研究から考えられた疎外感に関する尺度と人格特性の関連について安易に一般化することはできない。しかしながら、今後MMPIを臨床で活用していくための一助となり得ると考えている。今後は臨床データを元にした研究も必要であろう。

【文 献】

- Exner, J. E. (2000): *A Primer For Rorschach Interpretation*. Rorschach Workshop. (中村紀子・野田昌道 (監訳) (2002): ロールシャッハの解釈 金剛出版.)
- Greene, R. L. (1980): *The MMPI An Interpretive Manual*. New York: Grune & Statton.
- 井手正吾 (2010): 青年期大学生のMMPIの総合的検討(1) ー追加尺度・諸指標を含めた基礎資料ー 札幌学院大学心理臨床センター紀要 10 pp.13-23.
- 井手正吾 (2011): MMPIにおけるコンピュータ利用 野呂・荒川・井手 (編) わかりやすいMMPI活用ハンドブック 金剛出版 pp.297-309.
- 伊藤章代 (1997): 基礎尺度の暫定的な青年期規準 MMPI新日本版研究会 (編) MMPI新日本版の標準化研究 三京房 pp.231-247.
- 片口安史 (1987): 改訂 新・心理診断法 金子書房
- 木場深志 (2001): MMPI第4尺度(Pd)のハリス・リングース下位尺度の検討 日本性格心理学会大会発表論文集 10 pp.56-57.
- 木場深志 (2002): MMPI第8尺度(Sc)のハリス・リングース下位尺度の検討 日本性格心理学会大会発表論文集 12 pp.94-95
- Klopfer, B. & Davidson, E. E. (1962): *The Rorschach Technique-An Introductory Manual*, Harcourt, Brance & World (河合隼雄訳 (1964) ロールシャッハ・テクニック入門 ダイアモンド社)
- Levitt, E. E., & Gotts, E. E. (1995): *The clinical application of MMPI special scales*. 2nd ed. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. (木場深

志 (訳) (2012) : MMPI 追加尺度の臨床的応用第2版 三京房.)

Rappaport, E. (1978) : The Relation between trait Anxiety the Harris MMPI PD Subscales Among Psychiatric inpatients. *Journal of Clinical Psychology*, 34, 388-390.

Weiner, I.B. (1998) : *Principles of Rorschach Interpretation*. Laurence Erlbaum Associates.

Wrobel, T. A. (1992) : Validity of Harris and Lingoes MMPI Subscale Descriptors in an Outpatients Sample. *Journal of Personality Assessment*, 59, 14-21.